第5回　人が聖なる者となるために

第2章10節～18節　救いの創始者(2)

10　というのは、多くの子らを栄光へと導くために、
　　彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、
　　万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。
11　事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、
　　すべて一つの源から出ているのです。
　　それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、
12「わたしは、あなたの名を　わたしの兄弟たちに知らせ、　　（詩編22:23引証）
　　集会の中であなたを賛美します」と言い、
13　また、「わたしは神に信頼します」と言い、更にまた、（イザヤ書８:17,18引証）
　「ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」と言われます。
14　ところで、子らは血と肉を備えているので、
　　イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。
　　それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし
15　死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。
16　確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。
17　それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を
　　償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。
18　事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、
　　試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

今回は、前回の続きの10～18節を、またご一緒に、味わいたいと思います。
「救いの創始者」というテーマで書かれていた前半部分の５～９節では、イエス･キリストの十字架と復活の出来事に触れて、すべての人の救いのために御命を差し出してくださったイエスについて学びましたが、今回はそれを更に深める後半部分の学びに入ります。

ところで前回は、「救いの創始者」のテーマに関連した聖句として、パウロによるローマの信徒への手紙11: 36「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように。」が挙げられていました。
このパウロの言葉によれば、永遠なる栄光は（父子聖霊なる）神のみに帰されるものであられます。その栄光は、創造の御業に始まり、そこから神が紡がれゆく歴史を通して、すべての被造物なる人間たちを、神に在る自由（救い）と栄光（御国）に向かって導かれゆく上に、輝きます。そして、それらすべては、神のお導きに与る人間たちによって証しされ、賛美されることにより、神に帰されうるのだとパウロは宣言しています。

しかし今回は、これから学ぶ単元の冒頭10節で、何と「神が人々を栄光に導く目的を遂行されるには、『救いの創始者』であるイエスに、数々の苦しみを通って頂かなければならなかった（苦難の必然性があった）」という意味のことが述べられているのです。
ここは説き明かしの難所と言える箇所で、今回最初の関所であります。今回は、他にも難所と言える二つの関所を通過せねばなりません、ご一緒に、考えてまいりましょう。

第10節
というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。

＜なぜイエスは、数々の苦しみを経なければ「完全な者」とされえなかったのか？＞

この疑問の解決には、まず、神の御子なるイエスに対して「**完全な者とされた**」と表現されていることが、一体「何を意味しているのか」ということに、まず焦点を当てて考えてゆかねばなりません。
と申しますのも、神の御子イエスは、全ての初めから神と共に在られた聖い御方で、悪も穢れもなく、罪から隔絶しておられる「完全な存在」という証言は、聖書の中に沢山記されているからです。例えば、コリントの信徒への手紙二５：21＊1、ペテロの手紙一２：22＊2、ヨハネの手紙一３：５＊3などではそうしたことを非常にはっきりと証言しています。ですから、ここでの「**完全な者とされた**」という言葉は、「不完全なイエスが、完全な者になられた」ということでは、断じてないのです。

＊１「罪と何のかかわりもない方を、神は私たちのために罪となさいました。
　　私たちはその方によって神の義を得ることができたのです。」
＊２「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」
＊３「あなた方も知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません。」

ではなぜ、既に完全なるイエスが、この上何によって「救いの創始者として完全な者とされたと言われているのか？　そして、それによってイエスは何を完成されたのか？」ということが当然、問題になって来るわけです。
それは「イエス御自身が、数々の御苦しみと十字架刑を通して、救いの創始者としての我が身を完全な者と認識された」ということではありません。そうではなく、イエスが「数々の受苦＊」を経られた末に、極刑である十字架の死を偲ばれた。その経緯とその御姿をつぶさに御覧になって来られた御父が、この御子のどこまでも無垢なる犠牲の御体を、御自身への贖いとして相応しい「完全な人間」として受け入れられたことを意味しているのです。それによってイエスは、「全ての人類の罪責が免除されうるという、救いの道の創始者であり、完成者となられた」ということなのです。

＊イエスの数々の受苦とは、唾・鞭・茨の冠等の偽王の装い・罵倒などに代表される可視化される受難以上に、主の真実と御慈愛の対極にある、人間たちの「無知、無理解、無感動」なる受難の御苦しみを表しているのではと思うのです。それは、黙示録に「熱くもなく冷たくもなく、生ぬるいものをわたしは吐き出す」と言われるような者たちに対する主の霊的な御苦しみです。更に、ゲッセマネでの御祈りにおける、御父との義の契約の遂行と、地上に遺される者への哀惜及び無念なる彼らの信仰的未熟さの無念との葛藤の中で、血のような汗を流された御苦しみです。

具体的に「イエスが完成されたこと」については、次の三つのことが挙げられます。

＜イエスが完成されたこと（その１）＞

一つ目は「父なる神の召しに従って完成された、あるいは完全に行なわれたこと」これは「父なる神に、死に至るまで従順であられ、その御父の召しに従う生き方を完遂なさった」ということです。

私たちは、礼拝などで神の御前に出る時には従順になり、その御旨に従おうと志すわけですが、生涯に亘り神に完全に従い通すことは、至難、いや不可能です。そのような中で、イエスはそれを完遂されたと「御父とイエスとの聖なる関係」が述べられているのです。

＜イエスが完成されたこと（その２）＞

次に「イエスは、私たち人間と同じような「人の子」の立場を採られることで、人間の罪の贖いを完成してくださったこと」これは、私たちにとって非常に大切な問題です。

「イエスが受肉なさった」とは、神の御子としてこの世においでになられたと同時に、「人の子」ともなられたということで、このことは、救いの御業のためには不可欠な条件でありました。つまり、十字架上のイエスが「父なる神に対して御自分も神、ではなく、全く欠けのない無垢な人間そのもの」として御自身を献げられなければ、御父への贖いとして受け入れられ、人間を救うことがお出来にならなかったということです。

＜イエスが完成されたこと（その３）＞

最後に、「御子イエスは改めて、この世に対する完全な勝利を宣言されたこと」これは、御子として「人の子」として、御父が定められた生と死とのすべてのプロセスを完全に歩み通されたということです。それによってイエスは「**万物の目標であり源である御方**」として、「栄光の道への完成者」となってくださったのです。

第11節

事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、

＜救いの対象である人間は、本質的に聖なる者でありうるか？＞

ここでは大変難しい表現によって、「聖」という聖めの問題が取り上げられています。

「**救いの対象である人間**」つまり、イエスが受肉し、苦難と十字架刑をお受けになり、そして、その後のイエスの復活の力によって、完全に救い上げてくださった、その「救いの対象としての人間」は、本来、聖なる御方である神に、その「**源**」を置いています。言い

換えれば、人間は、聖なる神によって創られた存在であり、聖なる神の御意志から生まれた存在である、そういう意味から、一足飛びに「人間は本質的に聖なるもの」という考え方が、この11節を語る著者の基調にあるように思えます。

しかし、ここで、皆さんにお聞きしましょう。１）神によって創られ、２）神の御意志から生まれた、人類の始祖であるアダムは「**本質的に聖なる者**」であったのでしょうか？アダムは「**善悪の知識の木の実**」を食したから、元々の聖ではなくなってしまったのでしょうか？　　・・両方共、答えはNOですね。では、この著者は、１）２）以外の何をもって、人間の本質に「**聖**」という定義を当て嵌めているのでしょうか？

そもそも「**聖**」とは「この世と分かたれ、完全に分離された、神様の領域である」という定義がなされています。ですから、この世で完全に「**聖**」とされる人間は、受肉されたイエス様を置いて他にはありません。あるはずがありません。なぜなら、完全に内も外も「**聖**」であり続ける人間ならば、間断のない神様との応答が不可欠で、誰もそんな風に生き通しえないからです。

また「**聖なる**」とは、父御子御霊なる神様に冠する形容詞、更に、神様御用達の有形無形のものに付けられる形容詞です。ですから、この世に生きている人間には、キリスト教の洗礼者や聖職者と呼ばれる人々であっても、本質的には冠することのできぬ形容詞なのです。そもそも「**救いの対象となる人間**」とは、「神様に救われるべき人格的欠けや、罪・咎・過失の穢れを多かれ少なかれ帯びている人間、即ち、全人類」であるのですから。

つまり、結論から言えば、11節における「**人を聖なる者となさる**」御方のことも、その御方に「**聖なる者とされる人たち**」のことも、この世でのことではないということです。生涯の終わりに十字架の主によって裁きを免れ、御国の前庭パラダイスにて、死後の眠りから覚める復活の朝、キリストの聖衣を着せて頂いて天国の門をくぐり、そこで聖霊の満たしをお受けして後、晴れて御国での新しい命を生き始める・・その後の姿であるということです。そう捉えなければ、11節の言葉を受け入れ、納得することは不可能でしょう。

結局、この手紙の言葉を私たちが受け取ってゆく上で「人間」をどう捉えるのか、その「救い」をどう受けとめるのか、「贖い」をどう考えるのか、それによる「御国での復活」をどう捉えてゆくのか、ということがはっきり確認できていませんと、曖昧な部分、私たちが適当な想像において良しとしてしまう部分が、できてしまうのではないかと思います。
（既知のこととして読み流してしまう危険性があることを警告されています。）

「人間は聖なる者でなければならない」ということには、旧約聖書のレビ記19：２に
「あなたたちは聖なるものとなりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。」という御言があります。
神が聖であるから、あなたがたも聖なるものでなければなりませんと言っているのです。
つまり「聖なる者となるということは、ある意味では、神と一体化されるために、或いは神の所有となり切るために、神の属性を自分の属性としても持っていなければならない」

という主張であるわけです。（先に引用された、ローマの信徒への手紙の11：36に、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」がここでも当てはまります。）
しかし現世における私たちは、かかる「聖なる者」からは、限りなくほど遠い存在です。

＜「清め」は祭司から、「聖め」は神の御手から＞
そこで、旧約聖書におけるユダヤの祭司は、モーセの律法に規定された様々の状況に照らして清めの細則を作り上げ(祭司自身の手で清くすることは適いませんから) 、「こういう方法、こうした形で清くなることができるのです」ということで、「律法」を細かく定めています。それに従って、祭司が人々への「清めの儀礼」を行なってきたのです。
例えば、燔祭であるとか、罪祭であるとかで、犠牲を献げる、あるいは清めの行事が贖罪日に行われる、そのような機会を通して人間が清くなるための様々な儀礼様式を作り上てきました。
ですが、「どんな清めの儀礼を経ようと、そのことが人を聖くするわけではありません。それは清くして頂きたいと神に願う儀礼にすぎず、そうしたからといって、人が聖くなるわけではありません。」これはとても大切な真理であるのです。

人間は、水の洗いで外側を清めることはできても、人間の手で何を行なおうとも、人間の内側を聖くすることはできません。私たちがどんなに謙遜になり、どんなに忠実に神に仕えて人々に宣教したとしても、人を救うのは私たちではなく神であられるのと同様に、神の御手が介在されない限り「自らや他者を聖とする」ことは決して適いません。私たちは、聖ではなく、「神によって、聖とされねばならぬ存在である」ことをはっきり覚えること、それを証**し**し続けること、これがこの箇所で言われている大切なことなのです。
ですから「聖さ」ということを「神のみから与えられうるもの、神によって保証されねば、決して自分のものにはならないもの」ということに結びつけてゆかねばなりません。

実は著者は、この「**聖さ**」の問題を13節までの間に、「詩編」とか「預言者の言葉」を引証しながら、「神の御手に委ねること、或いは、キリストと霊的に一体になることによって初めて可能になること」という表現を用いて、繰り返し繰り返し語っているのです。

イエスは、本来聖くあらぬ私たちを、聖いものとされるために、「救いの創始者」として、人々から被られた御苦しみと、十字架の死にまつわる光と闇とを、私たちにお示しされることにより、悔い改めに導かれ、「栄光に至るべき道」を備えてくださいました。
そして、イエスは、かような道を開いてくださったばかりか、今現在も、神の御許に至る道へと私たちを導き続けてくださっています。主はその過程におかれて、私たちの裡に聖霊として宿られ、共にその道を歩んでゆけるように神の知恵を授けてくださり、神の御前に生きるに相応しい者となれるよう聖め続けてくださっています。こうした主イエスの御慈愛を私たちは片時も忘れることなく、お従いしお仕えして歩んでゆきたいと願います。

＜教会で執行される「二つの聖礼典」の意味＞

聖礼典と呼ばれるひとつに「洗礼、バプテスマ」があり、これは生涯一度限りのものです。洗礼志願者は教会において「私は、自分の罪を悔い改めると共に、キリストの十字架の贖いを信じます。それによって、私が冒したすべての罪の裁きから私を赦して頂けることを信じます。そして私に伴われる御臨在の主が、私を聖め続けてくださることを祈り願います。」等の公の信仰告白と、教会での承認を経て、父子聖霊の御名による浸礼ないし滴礼などの形で洗礼が執行されます。

そしてもうひとつの礼典なる「聖餐」は、「主が十字架上で私たちの贖いのために裂かれた御体、私たちの「復活の体」を象徴するパンを食し、また、主が十字架上で私たちとの命の契約のために流された血潮、私たちの「永遠の命」を象徴する葡萄酒ないし葡萄液を飲むことにより執行され、こちらの方は定期的に行われます。

特に「聖餐式」は、「キリストの死と復活を記念し、そしてキリストの現臨を覚え、更にキリストの再臨を待望する典礼」或いは「十字架の贖いの貴い御業を覚える典礼」などと言われていますが、正にそのことによって、私たちはキリストと一つになることが出来るという霊的体験を「あの日の聖餐！」というような聖餐式の中で味わうことが出来るのです。（それは、私たちの定期的な聖餐式のお恵みの中で味わう、主との間に特別な霊的インスピレーションが与えられた「特別な日の聖餐」でありましょう。）

また、別の視点からは、定期的に聖餐式に与ることによって、「聖め」へのステップを確認してゆく、つまり、神によって聖なるものとされてゆく過程を、洗礼後に何度も何度も定期的に確認してゆくことが、重要なのです。
そういう「聖めの典礼式」が、これまでユダヤ教で行われてきた「水による清めの儀礼」とは全く異なり、「イエス・キリストとの霊的結合によって生まれ来る聖め」と理解する課題が、これからのテキストでは大変強く主張されています。

つまり、その「聖め」は、「イエス・キリストと霊的に結び合わされることによってのみ生まれ来るもの」であり、ユダヤ人たちの律法の定めによる「水の清めの儀礼」において実現しうることではありません。その聖めをあなたがたの中で確かなものにしてゆくのは、唯、イエス・キリスト御自身の御心による他はないのです。

そのために、キリストは「人が、主の御心から的外れになっている状態（これが罪人の姿）」のためにゲッセマネにおいて祈りに祈られ、十字架刑により、今この世から立ち去られることを苦しまれた末に、その的外れの状態から正しい方向に立ち返ることができるようにと、むしろ十字架の苦難を進んで受けられました。そして、様々な人間の様々な罪責をすべて担われることを通して、彼らと霊的に一つになられることを決意されました。それゆえに、今や彼らは、（そして私たちは、）キリストの聖めのステップに与ることが許されているのです。そうして主に「聖なる者を目指す者たち」と認められたので、11節の最後で「**イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、**」**と、**著者は高らかに宣言しているのです。

第12節
「わたしは、あなたの名を、わたしの兄弟たちに知らせ、集会の中であなたを賛美します」と言い、

著者が11節の最後で「**イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、**」と告げたそのことは、決して著者が頭の中で考え出したことや、彼の理想などではなく、神が教会の兄弟たちに御心をお示しくださったことを立証するために、この12節では詩編22編23節の「**わたしは兄弟たちに御名を語り伝え、集会の中であなたを賛美します。**」を引証しているのです。

詩編22編の冒頭は、まさに、イエスが十字架上で**「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」**と神に祈り叫ばれた御言であり、その先に、この23節があるのです。このダビデの詩編歌は、強敵に囲まれた激しい苦難の呻きの最中、彼の切なる訴えに無応答なる神に対し、苦しみが尚増幅したダビデでありましたが、そんなどん底状態の彼の口について出てきたのが、23節の信仰告白だったのです！、そしてこの言葉を契機に恵みの御業が成し遂げられたダビデは、彼の持てる讃美を結集して高らかに神を誉め讃えました。それ故、この詩編歌は、古来ユダヤ人たちの間では大変大切に謳い継がれて来たのです。

ですから、その詩編は、23節によって「信仰者に対する迫害が押し迫っても、尚集会において神の御名を讃美し励ましあってゆけば、必ずや事態は好転させて頂けるのだ」と教えているわけです。そして「**あなたの名を、わたしの兄弟たちに知らせ**」と謳う中の「**兄弟たち**」というのは、罪に染った人々、ないしは自分たちに対して敵意を抱いているような人々をも含めて「**兄弟たち**」と呼んでいるのです。

＜敵意を抱いる人々を、なぜ兄弟とまで呼べるのか？＞

どなたかに「私の兄弟」と告げる、ないし呼びかける際、一番大事なのは、どういう方々に自分の兄弟となって頂きたいのかを「判断すること」です。それが常識というものです。それなのに聖書が「**あなたの敵を愛しなさい**」とか「**あなたを責める者のために祈りなさい**」とか「**迫害する者たちを祝福しなさい**」と語りかけている理由は、一体何なのでしょうか？

それは、彼らも神の御手によって創られた者に相違なく、キリストの贖いによって、彼らもまた聖められるべき存在なのだという、神とキリストとの御業に対する信仰と堅い信頼が、その背後にはあるからなのです。「この私を聖めてくださる御方は、私に敵対する彼らをも聖めようとされるに相違ない。キリストの十字架の贖いは不完全ではなく完全であられたのだ。その聖めを志して、それに与れぬ者は誰一人いない。ならば、その恵みは今も、すべての人々に向かって有効に働いているはずである。」ということを確信して、キリストの真理を味わってゆこうではないか、というお勧めが聖書には溢れているのです。

そして、この著者も「キリストの贖いは一回限りで完全に行われた、どんな人々に対しても、それは確立されているべきものなのだ」と宣言しています。
しかし、それが今尚「すべての人々のもの」とは成されていない現状は確かなことで、それに立ち向かうという意味を込めて著者は、「異教社会で、異邦人の中で、或いは、自分たちに敵対する者たちのいる集会の中で、主の名を讃美し続けようではないか、主の恵みを謳い続けようではないか、主の福音を証しし続けようではないか」と、詩編22： 23をここに引証したのでありましょう。

これらをまとめれば、著者が引証した詩編22編における解釈は、古来ユダヤ人たちがダビデの戦いにおける神の勝利の歌としてきた解釈とは随分違うもので、キリスト教徒の信仰における新たな目覚め、チャレンジとも言える解釈をしていることがお分かり頂けたのではないかと思います。
著者は、あえてその中で、23節に七十人訳聖書の言葉を持って来たり、色々な工夫を重ねて「私たちが信じているのは、旧約時代にも証しされた神の真理だが、中には、それを自分たちに都合良く解釈して、神の御心通りには解釈して来なかった言葉もある。それゆえ、私たちはキリストの恵みと憐れみによって、それらを正しく受けとめるべく、解釈し直してゆこうではないか。」という呼びかけが、この12節の中から聞こえて来るように思われます。
（著者は勇気のある人だと思います。このように解き明かされる松山先生も勇気のある方です）

第13節、
また、「わたしは神に信頼します」と言い、更にまた、「ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」と言われます。

前半の「**わたしは神に信頼します**」という言葉は、サムエル記下22：３の「**わたしの神・・わたしを逃れさせ、わたしに勝利を与え、不法から救ってくださる方**」や、イザヤ書8：17の「**わたしは主を待ち望む。主は御顔をヤコブの家に隠しておられるが　なおわたしは、彼に望みをかける。**」からの引証で、とても重要な主の御言です。
12節のダビデの歌を「神に対する信頼」として受けとめた著者は、今度はイザヤの預言の成就を「神に対する望み」としました。そしてそれらを二つ合わせ、イエスに対してする信仰告白としているのです。
つまり、著者は「イエス・キリストは、私たちを贖ってくださり、（激しい迫害の中にあっても）集会の中で讃美出来る力を与えてくださったばかりか、私たちに神に対する、かけがえのない信頼を与
えてくださった。だから、イエス・キリストに対して大いなる讃美を献げ、イエスを信じているという信仰において、自分を生かしていけば良いのだ」と語っているのです。

また後半の「ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」というこの言葉は、イザヤ書8：18「見よ、わたしと、主がわたしにゆだねられた子らは、シオンの山に住まわれる万軍の主が与えられたイスラエルのしるしと奇跡である。」からの引証です。
こういう形で神が私たち一人一人に豊かな恵みをもって臨まれ、確かな御愛をもって応えてくださるということを、著者の立場から表現し直して見ますと、
「イエスは、私たちと霊的に一つになられようとすることを通して、私たちを「聖別」され、聖化され続けてくださっている。かように、私たちを聖め続けてくださるイエス・キリストは、神から生まれられた存在であり、一方、聖められつつある私たちもまた、御霊によって新たに生まれ変わりつつある存在であるので、『すべてその源は一つである。』と言えるのである。」となるでしょう。

更にそこには、
「聖い御方は神御自身だけなのだ」と、ここでは語られています。そして、聖めを行なわれるキリストと、聖めに与る私たちとは皆、神の御旨によって、この世でのお出会い、この世での共なる歩み、この世でお関わりに与ることが許されています。

「だからキリストは、私たちを兄弟とお呼びになることを恥とはなさらなかったのだ。罪だらけで愚かで不誠実な私たちを、キリストだけは聖い者にしようと志してくださり、兄弟とも呼んでくださって、神の聖さに与ることのできる者として引き上げようとしてくださるのだ」と、そのように言うのです。「このキリストが私たちを贖ってくださる、更にキリストが豊かな恵みをもって導いてくださる。」というこの箇所は、とても大切な箇所であります。

ここで、詩編22編12節についてもう少し申し上げますと、教会の中心にイエスは『今』お立ちくださっており、メシアであるキリストが行われる活動について、非常にはっきりとした形で、イエスは御自分のお働きの御意志をお示しくださっています。即ち、神が私たち一人一人に与えてくださった深い恵みは、このイエスを通しても私たちの内に届けられ、その御方を仰ぐ時には、讃美せずにはいられない熱い思いにまで高められていくのだと、12節で詩編を引証する著者は、訴えかけているのです。
(ヨハネによる福音書14章に通じます)
また、13節の前半のところでは、イザヤが民の不信の中にあって、「私は神に信頼します。」と宣言し、自らは神に徹底的に寄り頼んでいることを伝えている引証を通し、キリストも死に至る苦難の生涯を通して、唯、神だけに信頼なさったという御姿をもう一度浮き彫りにしながら、指し示しているのです。

更にまた後半の「ここに、わたしと神がわたしに与えてくださった子らがいます」という箇所についても、「キリストの臨在と共生（霊として私共の内に宿ってくださること）」が非常に明確な姿で述べられています。

しかも、この箇所をあえて著者が置いた理由は、この手紙を書き送っている時代は、古代ギリシャ文明の発展していた時代ですから、グレコ･ローマン社会の中で、彼らは神々（偶像神）の存在を色々な意味で信じていたからです。ギリシャ神話にしてもローマ神話にしても、沢山の神々が出て来ます。神々が存在するということを彼らは認めているのです。
ところが、彼らが描いている神々というのは、それらの神話を読んで頂くと分かるのですが、この世の空間の中にはいないのです。それを超えた外側に住んでいると人間が設定した神々なのです。その神々は（或いは日本の神々もそうなのかもしれませんが、）人間に関しては全く関心がないのです。その神々は非常に自己充足的な神で、自分だけが満足な力を持ち、満足な働きができればそれでいいという設定の神々なのです。

それ故、筆者は「聖書の神はそういう神々とは根本的に違うのだ」ということを非常にはっきり打ち出そうとしています。言い換えれば、異教文化の神々の概念というものにある程度毒され、束縛されてしまっている人々に対して著者は「私たちの神はそういう神とは違うのです」と敢て主張したいと願い、「わたしの子」とか「わたしの兄弟」とかという言葉を用いて、気高い神との親密で特別な関係を明確に言い表わそうとしているのです。

第14節前半、
「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました」

＜キリストの受肉インカルナティオの秘義　その１＞
ここでいう「子ら」というのは私共でもあります。「**血と肉を備えている**」とは、土に帰るべき人間の本性を指しています。即ち、私たちは土から採られ、土によって成り、土に帰るべき存在でしかない「被造物」だといういうことです。が、イエスは被造物ではなく、土に帰られることもありません。けれども神は、イエスにも人間と同様の血と肉を備えられたのです。 これがインカルナティオの秘義であり、「キリストが、人間の罪責を贖う者として『受肉』なさって、地上に降られたこと」の意味なのです。

第14節後半～15節
それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。

ここも説き明かしの難所、今回二番目の関所です。はっきり申し上げて、生と死をつかさどるのは、悪魔でなく、天の御父であられ、また、イエスは決して、地上の支配者として人間を縛っていた悪魔を滅ぼすために、サタンへの犠牲の供物となって十字架にお架かりになったのではありません。イエスは、人類のすべての罪責を贖うため、御父への宥めの

献げ物として、神性を封印された御自身の人間としての御体を、御父へ献げられたのです。
しかし14節の著者の言葉「**死をつかさどる者、つまり悪魔**」が記されている背景には、当時オリエントからペルシャ全域に流布していた、地上における「天使の支配」という思想の影響と考えられます。悪魔とは堕天使のことでありますから。
更に、この時代にはサタンの権威が非常に現実性をもって受けとめられていたという、気味の悪い話もあります。例えば、サタン=悪魔というものは、死をつかさどっている存在として描かれ、イメージされていたこともあったとか、肉体を滅ぼす力、それがサタンなのだ、というように考えられていたという、誤った認識が広がっていたようです。

パウロはサタンを「自分たちが神に従うことができず、神の恵みを喜ぶことができないような生き方をさせる力、それがサタンなのだ」というように、理解していたようです。人間を信仰から躓かせる力を振っている者という理解ですね。そうしたサタンは、決してあなどれる存在ではありません。

黒人の神学者であったJ・H・コーウという人が、このようなサタンの力からの自由とか解放とかいう事柄について語った言葉に大変興味深い文章があります。
「黒人が黒人であるとされている黒人性というものは、実は、人間ではなく黒人であると言っていることに他ならない。そしてこのような非存在的で非人間的な取り扱いの下で、どうしたら我々は生き残ることができるだろうか。奴隷は人間ではあり得ない。なぜなら自由は人間の本質に属するからだ。すべての人間が自由でありうるまでは、誰一人自由を謳歌できない。なぜなら、抑圧からの解放こそが万民の福音の本質なのだから。」と。

彼は「自分たちが黒人として差別され、抑圧されていることは、私たちの不利益、私たちだけの敗北ではなく、どの人間も、言い換えるなら、白人も含めて、彼らが皆不自由になっていることなのだ。もしも私たちの交わりの中に自由でない人間が一人でもいたならば、その交わり全体は自由ではないのだ。だから彼らの自由が保障されるために、私たちはキリストに在って自由になろうではないか」という発想をもって語っていくのです。

今日の解放という問題は、正にそういう事柄（J・H・コーウの主張）にかかって来るのではないかと思います。一体ここで解放と言った時に、どういうことから解放されると述べているのかという問題も出て来るのですが、先ず明確なのは「罪からの解放」です。

＜罪からの解放＞
「罪からの解放」は、別な言い方をすれば、「神が定めてくださったようには生きられない私たちの不自由さ、それがサタンの誘惑による罪なのだ。だから神の御言に従って生きられるように変えられていくことが『罪からの解放』なのだ。」とコーウは語るのです。
これは基本的には、自分たちが「何を望んで生きているのか」という問題と深く関わって来るのです。「キリストは私たちを『既に』自由にしてくださっている。だからサタンの力によるどんな中傷も、攻撃も、危険も、災害も、私たちの本質を損ねないことを知って

いれば生きられる。それこそが罪から解放されることなのだ。」とコーウは告げるのです。
（まさにその通りです。体験的な実感とともに悔い改めます。罪からの解放こそ自由です。）

＜死の恐怖から解放＞
また、私たちを、サタンが拘束しているものの一つに死の恐怖があります。そして「死の恐怖から解放されてゆくこと、それが自由になること」なのです。一体死の恐怖とはどういうものかと考えると、単純に考えれば、「肉体の死」の問題があります。私たちはいつか死んでしまわなければならない。死ぬことは経験したことがないから、何となく怖い、嫌だ、大層苦しいだろう、という悲観的な先入観があるわけです。

ところがR.M リルケという人は、このような「肉体の死」への恐怖は「小さな死」だ、そして自分自身の中にある「大きな死」にもっと目を向けていかなければいけないと言っているのです。その「大きな死」とは一体何か。それは私たちが「霊的な死に至っていること」なのです。それは「神なしに生きられるように考えてしまっていること」で、それを本当に恐れなければならないと言っているのです。

この「肉体の死」への恐怖と、「霊的な死」に至っている怖れとの体験を越え、最期に主の審判、即ち、一人一人が「神の裁き」の前に立たされることによって、「永遠の生命」への道と「永遠の死」への道との二通りの宣告を夫々が受けるわけです。この「永遠の死」に対しては、私たちはやはり恐れを持つべきなのです。それが、今の自分の生き様や日々の選択を決定づけ、自らを改善していき、やがては、それが「死の恐怖からの解放」に繋がっていくのです。

＜サタンからの解放、自由＞
ですから「サタン、即ち悪魔からの解放」は重要ですね。サタン、悪魔などという言葉を使うと、世の人々の中には、何となく漫画チックで滑稽だなと思う向きもあるかもしれませんが、この単元の冒頭で述べたように、パウロはサタンを「自分たちが神に従うことができず、神の恵みを喜ぶことができないような生き方をさせる力」と捉えています。つまり、主の救いの福音をねじ曲げて、信仰者をつまずかせ、堕落させる力を帯びた誘惑者、それが、贖い主キリストの敵なるサタンだということです。

しかし「**わたしはすでに**（サタンの暗躍する）**世に勝っている**」と宣言された主は、そうしたサタンの目に見えぬ縛りから、私たちを解放してくださるのです。そして私たちは「死の恐怖」をも乗り越えて自由になることができるのです。それがお出来になるのは「イエス・キリストだけ」なのです。

16節、
確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。

これはすごく面白い言葉ですね。イエスは天使たちをお助けにならなかった、と。これはつまり、イエスに仕えるべき存在として、御父の御心を伝えるために遣わされた天使を、イエスは助ける必要はあられないということですね。イエスはむしろ、イエスに御心を伝えられた人々（信仰の父アブラハムの霊的子孫）が、それをしっかりと受けとめ、受け継がれるられるように、助け、導かれる重大な使命があられるのですから。

第17節
それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。

＜キリストの受肉インカルナティオの秘義　その２＞
再び、ここで、受肉の真理について語っています。と同時にこの手紙の中で初めて、「大祭司」という言葉が出て来るわけです。この大祭司というのは、当時のユダヤ教の社会では、「年に一回大贖罪の日に雄牛の血を自分の家族のために、雄山羊の血をイスラエルの民のために、至聖所の祭壇に注いで贖罪の献げ物とする。そして、すべての者を聖とする贖いを人々に与える儀式を執り行う」という責務本来あったのです。

しかし、この大祭司は贖いを祈り願うことはできるが、自分自身の罪ある体では贖いを成し遂げることはできなかった。ところが、無垢な御体を有されるイエスは、真の大祭司となられて、すべてのキリスト者、主の教会のために、御自身でその贖いを完成してくださった御方なのだと著者は語っているのす。

後に学びます１０：１には、
「律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちを完全な者にすることはできません」と書かれています。大祭司がどんなに熱心に祈っても、どんなに毎年、清めの儀式を行っても、その礼拝者を、完全に免罪された者にすることはできないのです。けれども、この世に来られたイエスは、神への全きいけにえとなられて、人間の罪責を完全に償ってくださったということが、10章には大変丁寧に書いてあります。

イエスはそのようにして私たちを救ってくださり、完全に贖ってくださった。そのためには、「完全に無垢な大祭司なるいけにえ」として、神の御前に立つことが必要であった。この大祭司は、神が人間から選ばれるので、それに見合う唯一の存在をしての御子イエスが「人の子」として私たちの中にお出でにならなければならなかった、それが「受肉の秘義」なのです。（真に秘儀だと思います。人間となられた一つの理りをここで学びました。）

第18節
事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

ここも説き明かしにおける難所で、最後三番目の関所です。イエスの受肉を「試練の受け皿」とする捉え方は、人間と同じ肉体を取って苦しまれたことが、人間への同情や憐れみ、助け救われる御業に繋がったという説です。だが、これを逆に言えば、イエスは試練を受けている人と全く同じような試練を通られなければ、そうした試練を受けている人に同情されたり、憐れんだり、助け、救われることがお出来にならなかった、ということになります。果たしてそうでしょうか。 それでは、神の御子とは到底言えませんね。

イエスは、御自身の霊（聖霊）を発せられる御方であり、聖霊として働かれれば、どんな人の心中にも入ってゆかれ、苦悩のすべてをお知りになれるということは、著者の念頭になかったのでしょうか。これでは、イエスを人間レベルにまで引き下げてしまっていることになりますね。人間のカウンセラーですら、自分は体験したことのないような苦難にあった人のカウンセリングを、時にはものの見事に行っておられます。

よって、イエスの受肉は、人間の試練を、その人と同じように負って苦しまれることが目的ではあられません。何度も申し上げてきたように、イエスが人類の罪責を贖ういけにえとなられるには、御父に対して「完全に無垢なる人間の体」がどうしても必要だったのです。それは、神の御子イエスでなければ果たせません。なぜならば、間断なく御父との応答が繰り返される人生を歩み続けなければ、御父の御心に対し完全に従い通し、無垢であり続けることは不可能だからです。これがイエスにおける受肉の秘儀であられるのです。

「救いの創始者」なるイエスは、「救いの御業をお始めになると同時に、それを完全に担われた御方」であり、「救いの福音宣教を私たちの中にお始めになった御方」は、「今もその御業を、御体なる教会において継続していらっしゃる御方」でもあり、それが「主が共にいてくださる；インマヌエル」ということなのです。そして共にいましたもうイエス・キリストとの確かなお交わりが、「主の日の礼拝」であり、そこで「神の御言による信仰のお養い」を受け、更に「聖餐によるキリストとのお出会いと、救いの確信の更新」をなすという、そのようなことをもう一度確かめておくことが、信者としての歩みに大切であると思います。　　(1996年5月11日)

森容子先生によるクリスマス説教

「東方からの３つの献げ物」

マタイによる福音書２：1－12

皆様、メリー・クリスマス！　このご挨拶は、神様の独り子イエス様が、天から私たち人間の世界へ、神の国をまとわれて降って来られた、という、大いなる喜び、たとえようのない感謝を分かち合うための、ご挨拶です。
それは、今から約2千年前、日本の弥生時代にあった出来事で、御子イエス様が私たち人類の救い主として、天から降られ、マリアさんのお腹の胎児となられてお生まれになったという、奇しき出来事です。そのことによって、それまで、人間たちが冒した罪によって

堅く閉じられていた天国への扉が開かれ、天国への道が通じるということが生じたのです。これこそ、クリスマスの真のお祝いであります。

皆さん、クリスマスというと、何を連想されますか？　ツリー、リース、イルミネーション、ケーキやご馳走が並んだパーティ･･･でも、何と言ってもプレゼント、サンタさんからとも言われる素敵な贈り物ですよね。

ところで、聖書の中で、最初に「贈り物」が出てくる箇所は、どこでしょうか？　それは旧約聖書の創世記で、信仰の父と言われたアブラハムが、息子イサクのお嫁さんを捜しに、彼の故郷へ召使を行かせた時のことです。僕は聞きます。「**もしも、そのお嬢さんがこの土地へ来たくないと言ったなら、御子息イサク様をあなたの故郷にお連れしてよいでしょうか**。」と。アブラハムは「**決して、息子をあちらへ行かせてはならない**。』と答え、ラクダ10頭を含めた高価な贈り物を持たせて僕を出かけさせたのでした。

また、そのイサクの息子のヤコブが、騙しうちのようなことをして長子の権利を奪ってしまった兄のエサウに、後年再会する時、エサウを恐れるヤコブはとびきりの贈り物を用意しました。山羊と羊とを各々220匹、牛50頭、ろば30頭、ラクダ30頭等を先に行かせて、僕にこう兄エサウに告げるよう命じました。「**これは、あなたさまの僕ヤコブのもので、御主人のエサウさまに差し上げる贈り物でございます。ヤコブも後から参ります**」と。

このように、贈り物は、旧約時代も現代も、相手に好意を示して、こちら側に引き寄せたり、怒っている相手を宥めたりと、その効果を期待できるときには、目一杯のものを惜しみなく捧げるという風潮があります。
そして時に贈り物は、契約を結ぶための意味も成しました。旧約時代は、井戸の使用権に関する契約や、国と国との同盟の締結などの時には、金銀の贈り物が媒介となりました。

しかし、頑なに贈り物を拒否した人もいます。エリヤの後継者エリシャです。アラムの王の家臣ナアマンの重い皮膚病を癒した際、ナアマンからお礼の贈り物の申し出がありましたが、「**私の主は今生きておられる**（つまり、癒しの業は私の手柄ではない）」と言って、頑として受け取りませんでした。しかし、エリシャの僕のゲハジはそれをもったいながり、勝手にナアマンを追いかけて行って、銀一キカルと着替えの服二着の贈り物をせしめました。が、それを知ったエリシャは怒り、ゲハジに重い皮膚病を負わせて、去らせました。これも考えさせられる出来事ですね。

さて、今回の東方の占星学者たちから、幼子イエス様への贈り物は、いかなる意味があるのでしょうか。そこに何か策謀や魂胆があったのでしょうか。いいえ、そんな気配は感じられません。しかし、この特別な贈り物のことは、いにしえからの神様の定めであったことは確かです。イザヤ書60：４－６に「**目を上げて、見渡すがよい。みな集い、あなたのもとに来る。･･･海からの宝があなたに送られ、国々の富はあなたのもとに集まる。らくだの大群、ミディアンとエファの若いらくだが、あなたのもとに押し寄せる。シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる**。」とありま

す。

このミディアン、エファ、シェバの人々というのが、創25：１－６に出てくるアブラハムの第三夫人ケトラの子孫なのです。ケトラの６人の息子たちは皆、賢明で知恵に富んでいたようで、第一夫人サラの息子で正統な後継ぎのイサクを凌駕する恐れがありました。それで、アブラハムはイサクから遠ざけるため、彼らに贈り物を持たせて、東方に移住させたのです。
今回は、その子孫である彼らの方が、とびきりの贈り物を携えて、東方からはるばる元々の出身地へやってきたというわけです。 では、その訪問の行程と、イエス様への３つの贈り物の意味を、ご一緒に考えてまいりましょう。

1－２　イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

ここで、ヘロデ王と言う言葉が、その場面の闇を暗示しています。彼はヘロデ大王と呼ばれて、エルサレム神殿の造営を行ったり、民が困窮した時は税を免除したり、難民に穀物の施しをしたりと、長期間パレスチナを統治して平和と秩序をもたらして活躍した王ではありましたが、性格に致命的欠陥がありました。
　人に対して非常に疑ぐり深い人で、自分の地位を脅かす者は、近親者と言えども処刑するという残虐性を帯びていました。実際ヘロデは、妻とその母を殺し、長男と他の二人の息子も殺してしまいました。ですから、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」という噂のメシアなる子を、ヘロデが放っておくはずがありません。

3－４　これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。

残虐なヘロデを通して恐ろしいことが起ころうとしています。東方からの占星術の学者たちが、エルサレムに立ち寄らず、ヘロデ王に余計なことを申し上げないで、直接ベツレヘムに向かって居れば、こんな危険な事態には陥らなかったはずです。しかし、これも神様の深い御心がお働きなのであります。

恐らく、学者たちは、エルサレムの近郊までやって来て、かの導きの「星」が見えなくなってしまったのでしょう。というのは、「ユダヤ人の王としてお生まれになった御方」と言えば、王ヘロデの子息に違いないという先入観が生じていたせいだと思われます。そうした自分たちの勝手な思い込みが、神の導きの光を覆い隠し、暗くしてしまったのです。見えていた導きの「星」が、ここまで来て、突如見えなくなってしまったのです。

しかし、実際その時、ヘロデの王子は生まれていませんでした。この事実を知った学者たちは愕然とし、自分たちの大いなる過ちに気づきました。そして改めて、いにしえのイスラエルの預言者の言葉を調べ直しました。

5－6　彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

この言葉は、旧約の１２の小預言書のひとつ、ミカ書5：1－4です。
「**エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。まことに、主は彼らを捨ておかれる、産婦が子を産むときまで。そのとき、彼の兄弟の残りの者は、イスラエルの子らのもとに帰って来る。彼は立って、群を養う、主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶからだ。彼こそ、まさしく平和である。**」

7－8　そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

ヘロデは、その子の生まれた「場所」や「時期」を確かめ、更に、もっと詳しい情報を得たいと望みました。「わたしも行って拝もう」というのは、何かぞっとして、鳥肌の立つような言葉です。「行って、拝もう」ではなく「行って、殺そう」と聞こえてまいります。

9－10　彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

ここへ来て、学者たちが、ヘロデ王に傾いていた心から、神様への信仰に立ち返ったことが、ありありと理解されます。悔い改めと共に、神様との和解が成立し、再び「星」の導きに与ることが赦されたのです。出エジプト記では、昼間は雲の柱、夜は火の柱が導いた、と記されますが、ここでの「星」の導きも、聖霊なる神様の導きを象徴していると言えましょう。

また、「幼子」とありますから、もはや生まれたての乳飲み子ではありまん。「ついに」という言葉も、その長い道程と長かった期間とを、端的に表現しています。そして、学者たちには、ついにその日がおとずれて、喜びに溢れたのです。しかし、その喜びは、幼子のいる場所の上に止まっている「星」を見て、とありますから、　彼らは信仰者というより、「星」の観察者、やはり占星学者としての域を出ない者たちであることを知ります。

11　家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

そこは勿論、ベツレヘムの宿屋の「家畜小屋」ではありません。幼子イエス様は、マリア、ヨセフと「家」に住まわっておられたのです。ベツレヘムはダビデの町で、ベーツ：家、レヘム：パンと言う意味ですから、ベツレヘムはパンの家、即ち、後年「わたしは天から降って来た命のパンである」と仰ったイエス様の家となられました。
彼らは、幼子イエス様に対し、極めて恭しく礼拝を捧げました。そして、遠路携えてきた宝の箱を開け、黄金、乳香、没薬をお献げしました。

黄金は、王に相応しい贈り物です。まことにイエス様は王としてお生まれになった御方でありました。けれども力によってではなく、愛によって支配する王で、イエス様は人の心を支配しましたが、それは権威ある王座からではなく、十字架上の御愛からでありました。
乳香は、祭司へ献げる贈り物です。神殿において礼拝と犠牲が奉げられる時に用いられました。祭司とは「橋を架ける人」と言う意味で、神と人との間に和解と赦しの橋をかける役目であります。イエスは特に大祭司としての使命を帯びておられます。
没薬は、「死者」への贈り物です。これは、ミルラ・アロエ・シナモンを混合したもので、腐敗と腐臭を緩和するために死体に塗るものでありました。イエス様が人のために生き、最期に人のために死なれることを象徴したもので、人々にご自分の生命と死とを与えるために来られたということを表わしています。
これら３つの贈り物は、イエス様が、やがて、まことの王、完全な大祭司、唯一の贖い主となられることを見事に予告したもので、これこそ、神様の御心による贈り物です。

しかし、黄金・乳香はともかく、死者へ塗るための没薬をわが子の誕生祝に奉げられるというのは、マリア、ヨセフにとって、どんな心持だったでしょう。不吉な予感が心をもたげたでしょうか。それとも、特別な運命を背負った幼子イエス様を、神様からのお預かりものだと、いよいよ深く自覚したでしょうか。そのないまぜの心持ちであったのではないでしょうか。
この3つの贈り物は、救い主の誕生を恐れたヘロデ王が、2歳以下の男子を皆殺しにとお触れを出した際、ヨセフ一家がエジプトに逃避するにあったって、確かな生活資金となったとの説も聞かれます。

12　**ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。**

この節は、やや不可解な節です。もし「夢のお告げ」がなかったならば、帰りにヘロデ王の所へ立寄り、王の言いつけ通り、幼子イエス様の居所やその一部始終を王に告げ知らせたということなのでしょうか。
そして、彼らが帰っていってしまう後ろ姿を思いますと、遠く東の国からベツレヘムまで

の道のりを「星」に導かれ、幼子イエス様にひれ伏して礼拝し、3つの贈り物を捧げたまでは良かったのですが、それら神の御心をすべてなし終え、ふと我に返ればと、魔法が解けたように、異邦の国の占星学者に戻ってしまった、ということなのでしょうか。

しかしながら、彼らは実際、ヘロデ王に仕える道を選ばず、「夢のお告げ」の通り、別の道、即ち、神様が導かれる道を通って、自分たちの「東の国、恐らくペルシャ」へ帰っていきました。この「夢のお告げ」というのは、旧約聖書では、神様からの預言を表わすものとして、とても重要視されています。そして彼ら占星学者は、何を隠そう、この夢解きの専門家なのです。彼ら（ペルシャではマギと言いますが）、哲学、薬学、自然科学に秀でて、また、占いもし、夢解きもしていたと言われています。そして、その地位は、イスラエルの祭司職レビ人と同様であったとも言われております。

では、東方からの知恵者が、なぜ神様に特別に選ばれ、神の民ユダヤ人を差し置いて、イエス様の御降誕を寿ぐ栄誉を与えられたのでしょうか。最初に申し上げたように、東方の人々は、元々アブラハムの子孫であったのです。ですから、アブラハム以降の旧約世界で起きたバビロンへの捕囚という大きな出来事から70年後、バビロン帝国を制圧した東のペルシャのキュロス王が、イスラエルの捕囚の民の帰還を許し、エルサレム神殿の再建にも尽力してくれた出来事も、決して奇跡とか偶然ではありません。元々、根は一つの民なのです。そこに、神様のご意志が豊かに働かれたということなのです。

私たちはとかく、人を分けて考えます。東方の人とか西方の人と。しかし、神様のお働きは、そんな隔ての壁を越えて、人々を自由自在に、御心のままに用いられ、導き、愛し、救われます。主は、御自分の被造物である、この世の生けとし生ける者の救いのために、更に、既に死の眠りについた人々の甦りためにも、胎児となられて、この世に降ってくださったのですから。

この救いの光、十字架からの甦りの光は、今も私たちの人生を、暗き中においても、あまねく照らしてくださいます。主イエス・キリストは、私たちの世界の只中に生きておられ、私たち一人一人をこよなく愛し続けていてくださいます。主の十字架の贖いは、あなたへの最高・最善の御愛の証しなのです。

それでは最後に、私たちがイエス様に、お奉げするに相応しいものは、いったい何でしょうか？　今回、松山先生が講述の中で挙げられたローマの信徒への手紙11：26「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように。**」を思い出してください。
このパウロの言葉によれば、すべては、神の創造の御業に始まり、そこから神の最善なる御心において、すべてのこと、即ち、人間の完全なる救いと、完全なる裁きとが達成されます、そして、私たち人間が成すべき唯一のことは、そのすべてを神の永遠の栄光として神に帰することです。
ですから、主からすべてを賜っている私たち人間が、主にお献げ出来るものは、主と主の救いの御業をこの世にお証しすること、主の御栄光を高らかに賛美すること、そして、そ

の主を心からお慕いすることです。この「証し」「賛美」「愛」の3つの献げ物をもって、私たちも御子の御降誕をお祝いしましょう。最後にもう一度、皆様、メリー・クリスマス！

第5回写者あとがき　　2024年12月23日　　写者　小原靖夫

現在、私たちは松山幸生先生著「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の写書の2回目にチャレンジしております。第1回目は忠実に写書することに精一杯でした。そして大きな刺激を受け第2回目になり、気づきましたことはこの著の特徴です。一つは松山先生が前書きでご指摘されているように聞き手は「ある程度の相互理解の上に立って」いる人々でした。従って時に雑談があり、その中には時代的に古くなったものがあります。今回からはそうした古くなってしまった事柄については省略させていただきました。どうしても言い換えが必要な場合には森容子先生にお願いして、現在の読者にご理解いただけるように補足していただきました。松山幸生先生と森容子先生の信頼関係は厚く、お考えも相互によく理解し合った間柄です。私たちの願いは一人でも多く松山幸生先生の講述を現代の言葉でお伝えすることです。関係者の皆様のご理解をお願い申し上げる次第でございます。

さて第5回の講述は殊の外、難解でした。ヘブライ人への手紙の原文の読み込みが、神学を学んでいない私には理解できないものでした。従って松山幸生先生の講述を読み込みましても消化不良の状態が続き月内ギリギリの発表となってしまいました。森容子先生のご指導で写書した内容から、今、私が理解できる限りの力で「あとがき」を記します。

今回の内容のベースになっていることは「聖なること」「神の栄光」だと思います。
親しみのあるパウロの言葉がベースにあるとも思いますので引用します。
「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっています。」
（ローマ信徒への手紙11章36節）
永遠の栄光は父子聖霊なる神のみに帰される。その栄光は、創造の御業に始まり、そこから神が紡がれてゆく歴史を通してすべての被造物なる人間たちを、神にある救い（自由）と栄光（御国）に向かって導かれていく上に輝きます。このことをしっかりと身につけておかなければ、今回の箇所は理解できないばかりか誤った解釈で終わってしまいます。この点を強調されたのが森容子先生です。

『救いの創始者」であられる神、イエス様に何故「苦難の必然性」があったのか。完全に聖なる神が何故「人**の子**」とならなければならなかったのか。私たちの信仰告白、使徒信条に迫る疑問が呈されいるのです。
10～11節の説き明かしを読み、私がたどり着いたのはフィリピ信徒への手紙2章6節から11節でした。
６キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、

７かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、
８へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。
９このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。
10こうして天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまづき、
11すべての舌が『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

ヘブライ人への手紙の著者は、その奥にある神の義と神の愛の理解に至らなければならないことを2章10節で述べています。
聖なる神がなぜ受肉しなければならなかったか。「聖とはどういうことか、この世と分たれ、完全に分離された神の領域、聖とされる人間は、受肉されたイエス・キリストをおいて他にいない」、聖を貫徹される神は罪を罰せずにはおかない。そのゆるしを乞うためには聖なる生贄（贖いもの）が献げられなければならなかった。だが、この世に聖なる人間は一人もいない。神は独り子を聖なる人間としてこの地上に遣わしてくださった。その御子が十字架にかかられ、すべての人の罪責を代わって背負ってくださった、その愛の深さがこの10節には「救いの創始者」として書かれています。

無垢なる人間として御自身を献げなければ御父への贖いとはなりえない。
完全に聖なる者でなければ聖なる御父には受け入れられない。私たちが聖となるにはどうすればいいのだろうか。それは不可能、しかし、エフェソ信徒への手紙１章には次のような言葉があります。
4 「天地創造の前に、神は私たちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。
5 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。（私たちは聖ではなく、神によって、聖とされねばならない存在であることを言っている。）
6 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、私たちがたたえるためです。
7 私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。
8 神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、
9 『秘められた計画』を私たちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。
10 こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地あるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。
11 キリストにおいて、私たちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものを相続者とされました。
12 それは以前からキリストに希望を置いていた私たちが、神の栄光をたたえるためです。

13 あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いのもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。（神のみから与えられうるもの、神によって保証されねば、決して自分のものにならないもの）
14 この聖霊は、私たちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、私たちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。
15 こういうわけで、私も、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、
16 祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。
17 どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、
18 心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。
19 また、私たち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きい者であるか、悟らせてくださるように。
20 神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右に着かせ、
21 すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべきよにも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。
22 神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。
23 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。
長い聖句の引用になりましたがすべての御言葉が今回の講述には寸分なく当てはまります。
ヘブライ人への手紙2章11節は更に奥深く復活の秘儀に迫っています。このように私たちが「栄光に至るべき道」を備えてくださり、今も神の御許に至る道へと私たちを導き続けてくださっていると著者は語っていると説き明かしてくださっています。その具体的なことが教会で執行されている「洗礼式」と「聖餐式」であると説き明かされ、その説明を詳しく今回の箇所で松山幸生先生も強調されています。

更に圧巻は詩編22編を取り上げて、なぜ、イエス・キリストがあの悲痛な言葉を叫ばれ救いを完成されたのかを語っておられる。ダビデの讃歌全体を見渡し理解することによってはじめて「エロイ・エロイ・レマサバクタニ」の真意が理解することができました。
今回の説き明かしは何度も何度も読み込むことによって信仰が深められ、救いの確信が強められると思います。やっと辿り着いたと、ひとり涙をこぼしています。
松山幸生先生の深い読みと、更にそれを噛みくだいて私に分かるように説明してくださった森容子先生に感謝します。